

はじめに

飛塚古墳は、竹谷川の北岸、水田に囲まれた見晴らしのいい場所に位置しており、菰野町内では最も大きい古墳の1つです。別名「首人塚」「遠見塚」ともいい、明治時代に鉄刀・銅鏡・勾玉・管玉などが出土したと伝わっていますが、古墳が造られた時期などはわかっていませんでした。

菰野町の朝明川上流域には、古墳時代後期（6世紀；今から約1450年前頃）に造られた高塚古墳群・奥郷浦古墳群などがあることから、『菰野町史』が書かれた際は、飛塚古墳も古墳時代後期に造られたとされていました。



飛塚古墳の位置〔国土地理院「菰野」より〕

発掘調査の成果

今回調査したのは、古墳そのものではなく墳丘の北側です。古墳の周りを区画していた溝（周溝）が掘られていた位置にあたりますが、残念ながら周溝は後世に壊されており、ほとんど残っていませんでした。古墳の草刈りを行ったところ、直径28mのきれいな円墳であることがわかりましたが、墳頂があまりにも平らなため、埋葬施設（墓坑）は既に削平されていると考えられます。

しかし、墳丘の裾付近から古墳時代中期前半（5世紀；今から約1600年前）に作られた埴輪が出土したことから、飛塚古墳がその頃に造営されたことがわかりました。出土した埴輪のなかで注目されるのは建物の形を模した家形埴輪です。最も多く出土した円筒埴輪は、古墳の上に並べられていたもので、墳頂や墳丘を囲うように配置されていたと推測されます。特殊な家形埴輪が出土したこと、赤く塗られた円筒埴輪が珍しい形をしていることから、飛塚古墳は、この地域にいた豪族などのお墓であったと考えられます。

また、出土した埴輪のなかには古墳時代中期後半（5世紀後半；今から約1550年前）の朝顔形埴輪が含まれることから、飛塚古墳が造られた後、近くにもう1つ古墳が造られていた可能性があります。鎌倉時代になると、水田の開墾などで古墳の北側が削られ、古墳の周溝は埋まってしまいました。調査区内では、江戸時代から昭和頃の川の跡と木組みの堰がみつかり、つい最近まで、古墳の北側に水路があったことがわかりました。



調査前（草刈前）の飛塚古墳



調査後（草刈後）の飛塚古墳

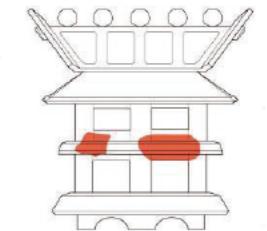
出土した埴輪

埴輪とは、古墳の墳丘や周辺に並べられた土製の置物で、墓域を区画するものや、葬送の様子を表しているものなど色々な種類があります。飛塚古墳にはどのような埴輪が並んでいたのでしょうか？

■ 赤く塗られた家形埴輪



①



家形埴輪とは、豪族の住まいをかたどったもので、古墳の墳頂、中心部分に据えられていたと推測されます。飛塚古墳の家形埴輪は二階建てで、外面が赤く塗られています。①は1階の窓の庇部分で、位置は建物の隅にあたります。②も同じく庇部分で、窓の一辺が残っています。

■ 赤く塗られた円筒埴輪



円筒埴輪は墳丘の周りや墳頂を区画するものです。飛塚古墳の円筒埴輪は、ずんぐりとした筒状部と壺のような口縁部をもち、表面が赤く塗られた不思議な形をしており、透孔は三角形です。赤色顔料は口縁部の内面にも塗られていました。

■ 壺形埴輪？



二重口縁壺、もしくは二重口縁壺形埴輪です。赤いものや、底に穴が開いているものがあります。



朝顔形円筒埴輪は、窯で焼かれています。飛塚の埴輪よりも、50年ほど後の時代に作られたと考えられます。



ヘラで記号が書かれています。右側には方形の透孔があります。

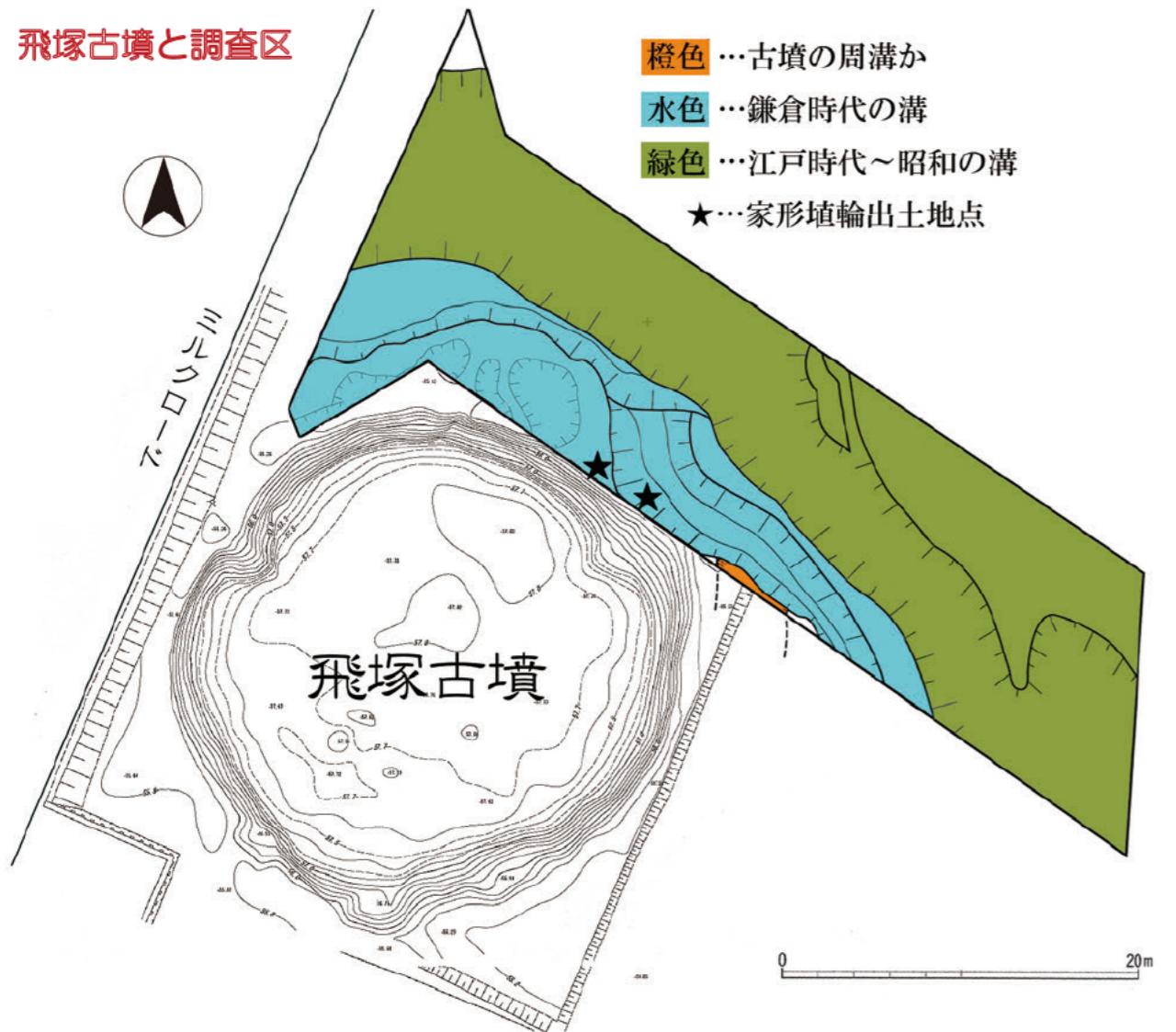
△

△

飛塚古墳 発掘調査現地説明会資料

2012年8月4日 三重県埋蔵文化財センター

飛塚古墳と調査区



古墳の変遷



おわりに

今回の発掘調査で、周溝の一部が見つかりました。また在りし日の飛塚古墳を知るため、たくさんの手がかりを得ることができました。調査区内で見つかった溝は、どれも古墳を迂回するように流れています。鎌倉時代や江戸時代のひとびとが飛塚古墳を守るよう意識していたことがわかりました。調査前に鬱蒼と茂っていた笹竹がなくなり、今はミルクロード（県道140号線）からも古墳の全体像をうかがい見ることができます。飛塚古墳は、今後も地域のなかで守られていくこととなります。



調査遺跡名：飛塚古墳

所 在 地：三重郡菰野町大字大強原

規 模：円墳（直径 28m、高さ 2.5m）

時 期：古墳時代中期前半（5世紀：今から約 1600 年前）

調査期間：平成 24 年 5 月 22 日～8 月 31 日

調査面積：718 m²

原因事業名：国道 477 号湯の山道路道路改築事業

三重県埋蔵文化財センターHP：<http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/maibun/>